美術による人間と諸機関の活性化

－幼稚園、介護施設を中心として－

Fine Arts Activate Human Being and Organizations

－In the case of kindergarden and facility for nusing care－

研究代表者　横尾哲生

YOKOWO Tetusei

埼玉大学教育学部　教授

Professor, Faculty of Education, Saitama University

はじめに

人が人間として生み出した表象芸術（美術）のあり様を思考することに於いて、その実践的研究を重ねてきている。

本研究は、人間及び人間の集団機関としての社会施設機関の内の、幼児教育機関及び高齢者医療福祉機関に目を向け、美術の表現、観照行為の律動に重きを置き、実践するものである。
幼児期に於いては、環境としての＜外の世界＞の把握によって育まれるその精神＜内なる世界＞の充実度を図り、高齢者に於いては、＜内なる世界＞と＜外の世界＞の整合性を計ることによって心身の活性化を推進することを目的とする。

概要

1．主な研究費

本研究は、科学研究費補助金　基盤研究C　研究（2）　一般分野時限　細目　表象芸術課題番号 15604002 の交付により推進している。

2．研究組織の形成と実践研究の場

幼児教育機関及び高齢者福祉機関において、実践の場の形成を計ると共に、実践者の共同研究組織形成を行うこととして、現在以下の組織及び組織を形成した。

①　研究組織

a 環境芸術学会　人と社会の活性化研究部会　2005 年1月成立。

現在、学会会員　17 名、学会員外協力者　5名、協力団体・企業　8

②研究実施機関

a 高齢者医療福祉施設

医療法人社団いばらき会　1999 年 5 月～

「たびこの湯」　　通所介護施設

「おおみかの湯1F」 重度認知症高齢者通所介護施設

「おおみかの湯2F」 通所介護施設

b幼児教育施設

学校法人　聖和学園・竜ケ崎幼稚園　　2000 年 3 月～

学校法人　大宮信愛学園・大宮幼稚園　2005 年1月～

3 実践協力設定

高齢者ディサービス・幼稚園それぞれの施設運営管理者のもと、以下を設定し実施を重ねることで、美術による活性化の可能性を探ることとした。

①ディサービス施設

a.スタッフレクチャー、介護士美術講座

b.ギャラリー開設、展覧会開催、ギャラリートーク

c.美術講座開設、高齢者各施設巡回・週 2 時間

②幼稚園

a.ギャラリー開設、展覧会開催、ギャラリートーク

b.ワークショップ、展覧会と連動し、美術作家の講座・2 日間コース

c.スタッフレクチャー、教諭美術講座

各施設の実情に合わせ、美術に触れること、美術に近づくこと、実践体験を重ねること、美術による活性を実感することを目的とし、プログラムを検討することを旨とした。

なお、展覧会経験、美術講座の経験豊富な美術家の選択、及び世界の主たる画材のうち、安全性・機能性の優れたものの選択に関しても、随時各施設管理運営者と協議を重ね、展覧会・講座のスムーズな推進を図ることとした。

研究成果

1.施設・機関において

幼児教育施設及び高齢者医療福祉施設は、今日においても、それぞれの年齢・症状等において、一定の幅の人間の隔離的要素が多く、成立基盤の思考において社会に開かれたものとはなりがたい要素を多く思い出すこととなった。機関の組織形態、施設の要素設計・空間設計等、基盤への思考を必要とする事を改めて確認した。

2.施設管理運営者において

社会的に固定された美術観の根は深く、知識的部分の偏重と共に自らの感性に対する疑問や恐れが強く、美術への嫌悪感とも言える感情を内に秘めつつ，幼児や高齢者の美術に携わる危険性の高さを痛感することとなった。しかしながら、直接的体験及び講師の的確な指導に加え、幼児及び高齢者の構えのない美術の吸収を通し、自らの内面的活性を育む方向を目指すこととなっている。 ギャラリー・画廊の運営方法、管理業務の専門性の高さ、難しさが、回を重ねるごとに表れ、従来の教諭・介護士ではなく、十分な専門教育を受けた人材育成の必要性を強く感じることとなっている。

3.幼児・高齢者において

素の状態の幼児、またある意味で社会的観念の束縛から解かれた高齢者においての表現活動、観照活動は実り多く、美術家の期待以上のものを示すことも多く、その実践の重要性が認識された。

定性的判断として、数ヶ月、数年の単位で観察する上では、特に積極性、意志・意欲等の発露において、大きな成果を得たと判断することができる。

しかしながら、その成果の科学的判断を活性化という視点より下すに於いては、FMRI等の設備が必要であり、数値化は行っていない。美術の立場からは、定量化を不必要と判断している

4.社会的反応として

①「芸術と人間－医療の世界と環境芸術をめぐってー」　シンポジウム開催

環境芸術学会第5回大会 「かんきょう・連携・芸術」（2004年11月13日・於　武蔵野美術大学）

本会において、「芸術と人間－医療の世界と環境芸術をめぐってー」を、コーディネイトすることとなった。

医療、医療施設その外的環境から、そこで働くスタッフ及び利用者の心情にまで深まり今後への期待で幕を閉じた。

②「美術からの発信」　刊行計画　2005年10月18日出版予定　80頁　オールカラー　3000部

環境芸術学会　人と社会の活性化研究部会において、日本画材工業界の協力を得、刊行を計画。

幼児教育と高齢者医療福祉に従事する方々に向け、美術家の追及と社会姿勢を明らかにし、表現手段の具体的提示を行うこととした。

③「美術の活用－療養病床環境においてー」　特別プログラム開催予定

第13回日本療養病床協会　全国研究会　東京大会

“0（zero）” 原点からの出発 （2005年11月17・18日　ホテル・ニュー　オータニ）

医療界における、学会・協会のシンポジウムにて、美術の視点を明確に示す機会を、コーディネートする。

①　ユニバーサル画材　研究会発足予定

日本画材工業界の主力メンバーである企業数社と美術家有志で、社会的弱者に対応する画材開発の研究会を発足する準備に入っている。